

tam tam

2020.09

VOL.

06

P1 [特集]これからの時代の
情報発信を考える

P2 [特集]いろんな情報発信
市民ボランティアがつくるラジオ番組

P3 隣の自治協さん「幸世自治振興会」
丹波市民、学びの窓「広報紙と地域づくり」

P4 繋ぐ!市民活動「水上情報教育研究会」
活動事業者紹介「岡林写真館」

SPECIAL FEATURE

今号の特集

これからの時代の
情報発信を考える



市民がつくる音楽番組「サケラジオ」(上) シニアカレッジラジオ教養講座(下)

市民の様々な活動において、イベントの開催告知や実施報告、メンバー募集、コトやモノの宣伝など、広くお知らせしたい情報が存在します。この情報を新聞やラジオといったマスメディア、チラシ、ホームページ、SNSなど、どの媒体で発信するのが適切かは判断が難しいです。予算や誰が作るのかなどの条件によっても、発信方法は違ってきます。

また新型コロナウイルスの影響で、コ

ミュニケーション方法にも変化が起きています。オフライン（対面）を重視しながらも感染防止策を取る必要性から、一定の距離を保ちつつ、できれば直接出会うことのないオンライン（ネットワークでつながっている状態）でのコミュニケーションが欠かせない時代です。

市主催の高齢者向け生涯学習講座である「TAMBAシニアカレッジ」では、今年度の開催方法が大幅に変更され、FMラジ

オを活用したラジオ教養講座番組として実施されています。ラジオは「オフライン」と「オンライン」の中間的位置づけでもあり、高齢者を対象とした情報発信に適した方法と言えます。

今回の特集では、いろんな情報発信を整理し、丹波市のコミュニティエフエムの取り組みを交え、目的に合った情報発信について取り上げていきます。



丹波市市民活動支援センター

TAMBA CITY CIVIL AND COMMUNITY ACTIVITIES CENTER

Topics 01 いろいろな情報発信

身の回りには様々な情報発信や情報共有の方法があります。インターネットやスマートフォンの発展により、その種類は多様化しています。ここでは情報発信に使われる主なサービスとして、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）やその他の媒体を紹介します。

ライン LINE

友達同士のメッセージチャットやテレビ電話、テレビ会議ができるサービス。国内でも利用登録者数が一番多く、多世代に普及している。友達登録することでニュースやメールマガジンをダイレクトに受け取ることができる。

フェイスブック Facebook

記事や写真の投稿、団体ページ・イベントページの作成など複数の機能があるサービス。グループ作成等によって、共通の興味を持つ人とやりとりでき、新しい人と出会い、活動をつくることにも向いている。

インスタグラム Instagram

文章より写真や動画、ライブ配信に特化したコミュニケーションサービス。飲食店などで一方向での情報発信にも活用される。スマートフォンでの利用を前提に、見せ方など工夫されている。

ツイッター Twitter

短文や写真が投稿できる登録制のコミュニケーションサービス。相手が投稿したものにコメントをつけて共有できる機能があり、拡散力の強いサービスである。投稿の即時性もあるため、災害時の情報共有にも利用されている。

ユーチューブ YouTube

世界最大の動画共有サービス。誰でも無料で大量の動画視聴ができる。会員登録をすることで動画の投稿も可能となる。投稿すると世界中に発信でき自分の番組のようなものを持つことも、視聴者を限定することもできる。

ズーム Zoom

コロナ禍によって利用者が急増したオンライン会議サービス。会議中の画面共有やミュート機能、背景画像の変更などオンライン会議に便利なものが揃っている。また、会員登録をしていなくても会議に参加することができる。

広報紙

事業やイベントなど周知するために用いられる紙媒体。市内の自治協議会の場合、住民理解を促すために活用していることが多い。紙媒体であるため、SNSやインターネットに馴染みのない人にも手に取ってもらうことができる。

コミュニティラジオ

地域の情報に特化したラジオ。発信地域の不特定多数に発信することができる。ラジオは音声なので文章よりも多様な伝え方があり、工夫して興味を引き付けることができる。また、何か作業をしながら気軽に聞いてもらえる利点がある。

ウェブサイト

インターネット上の個別サイト。作成、配信するにあたり様々なサービスが存在し、それらを利用するで自由にサイトを作ることができる。しかし、利用するサービスによっては管理、運用、資金などが必要になることもある。

Topics 02 市民ボランティアがつくるラジオ番組

市内で開局する「FM805たんば」はFM波を使用する基幹放送事業者で、県域放送に対し、市町村を放送エリアにするコミュニティエフエム放送と位置づけられています。このコミュニティエフエムでは、基本は自主制作番組で編成され、市民参加による地域密着型のラジオ局として、地域の商業や市民活動、行政情報や独自の地元情報に特化し、地域活性化に役立つ放送をしています。

ラジオ放送による情報発信は、局からリスナー（聞く人）へ向けての一方的なものと考えられますが、郵便や電話、FAX、メール、ウェブサイトをはじめ、Twitter、Facebookなどで意見や感想を返信してもらうことで双方向のコミュニケーションが取れるツールとしても注目を集めています。

また、ラジオは音声のみのメディアですが、ウェブサイトやYouTubeなどの画像や動画を扱うメディアと組み合



YouTubeを併用したラジオ番組

わせることにより、視覚的にも対応したより深い活用の仕方も増えてきています。

隣りの自治協の さん治りの

TONARI no
JICHIKYO san

幸世自治振興会

温かみのある「ふるさと」づくりへ

幸世自治振興会は氷上地域の北部、人口約3,700人、約1,400世帯の北小学校区にあります。『ふれあい』あふれる“幸世”を目指し、幸世交流施設を中心にした交流の仕組みづくり、18自治会を5つのブロックに分けて親睦や交流活動を通じた地域づくりを進めています。

主な開催イベントとして、毎年秋に開催する「幸世元気まつり」や親子連れで参加できる川遊びイベントの「氷の川探索 川で遊ぼう」、とんど大会、お昼のつどい、各種スポーツ大会を実施し、住民の交流を図っています。交流施設では、さちよボランティアグループ、フラダンス教室、絵筆の会、ヘタの会、手芸の会、3B体操、体作り、そば愛好会など多くのグループ活動の拠点となっています。

住民を主役にする自由な活動

振興会で活動するグループの1つに、20~40代を中心に構成された若者交流会があります。毎年、交流施設を彩る「冬のイルミネーション」を進めたり、婚活イベントを開催するなど、若者の柔軟な発想と行動力を活かして、自発的に活動しています。

また、さちよボランティアグループの皆さんにより、「さちよふれあい食堂(子ども食堂)」を開催しています。毎月1回、これまでに8回開催しており、子どもは無料、大人は300円で多くの参加者が楽しく過ごされました。

さらに、交流施設の機能充実に向けて、喫茶コーナーの新設も準備しています。常設の飲食スペースとして、運営方法など話し合いを進めており、今年度中の事業開始を計画しています。交流施設全体として、より多くの人の交流と癒やしの場となることを目指して取り組んでいます。



昨年度のイルミネーション



第8回さちよふれあい食堂

丹波市民、学びの窓

広報紙の作成から見る地域づくり

今年度は行事が少なくなり、広報紙のネタに困る…という声が聞こえてくるこの頃。あなたの団体ではどうやって広報紙を作成していますか？

2019年度に丹波市行政へ提供された自治協議会の広報紙49紙を調べたところ、1紙あたり平均でコーナー数は6.6個、写真の掲載数は12.6枚、写真に顔の映っている人数は60.8人でした。掲載された写真からも、住民を多くピックアップし地域でのコミュニケーションが増すことを期待するものや、顔があえて映らない角度から撮影されているものなど、作成者の意図が見えてきます。

また、編集担当が「広報部」などチー

ム名になっている自治協は、提供のあった18地区中7地区ありました。その中でも広報を担当する委員会が編集会議を重ねて作成する地区があれば、事業を担当する委員会が記事を作成し、編集担当の委員会が紙面にしていく地区などもあります。他にも記事の作成や写真の撮影は推進員が担当し、編集作業はそれが得意な地域住民に依頼している地区など、それぞれのやり方で独自に作成されています。

鴨庄地区自治振興会では7月に、各自治会の人やできごとを紹介する「自治会だよりかもしょう」を発行しました。人との交流が制約される中で、地域の交流を図るために計画されまし

た。地域のクイズのコーナーもあり、住民からの応募を受け付けてコミュニケーションを図っています。

広報紙で何をどのように伝えるか、誰が担当するか、これらを考えることから地域づくりを楽しめるヒントが見えてくるかもしれません。また、他地域や様々な団体の広報紙も参考にしはいかかでしょうか？



地区ごとに特色のある広報紙



繋ぐ!市民活動

氷上情報教育研究会

小学校教諭の有志からなる氷上情報教育研究会は、35年の歴史があります。発足当時は、学校にコンピューターが1台あった程度で、そのコンピューターを使って、子どもたちへの教育の質を高めようと、山南町の全小中学校から参加者を募りました。時代の流れと共に、繋がりや丹波市全域、周辺市町村まで広がり、現会員は20代から学校長まで、総勢22名で活動しています。

今年度から小学5、6年生で、プログラミング教育が始まるとして、研究を進めてきました。また、生徒1人1台コンピューターや高速大容量の通信ネットワークを目

玉とした「GIGAスクール構想」も間近に迫っている中で、新型コロナウイルスの影響によるオンライン学習などの課題もあり、研究会の活躍の場面が多くなってきています。

「コンピューターはあくまでもツールであり、ツールを使って何を学ばせよう、どうやって学習の質を上げよう」が当初から変わらない基本理念です。教育委員会や各所属学校に捉われず自由に研究しつつ、つながりを広げています。学校教育に携わる人であれば誰でも参加できるオープンな場として、活動を進めています。



氷上情報教育研究会の皆さん



神戸で開催した成果発表会



活動事業者紹介

岡林写真館 (株式会社オカバヤシ)

岡林写真館は1892年創業、柏原で130年近く、丹波の人たちを撮り続けてきました。「スマホ等で誰でも簡単に、たくさん写真を撮る今、プロが撮る写真は、逆に昔のように特別なものになっている。その中に地域の写真館としての役割と価値があるはず」と語るのは5代目の岡林利幸さん。それを表す取り組みの1つが、今年で3回目になる「健康長寿丹波写真展」です。70歳以上のお年寄り50人のところに出向き写真を撮影、商業施設で展示する取り組みで、写真は敬老のお祝いとしてプレゼントしています。

岡林さんご自身の父親を亡くされた時や仕事の中で感じた「たくさん写真を撮る時代でも、最期にその人の事がそのまま伝わる写真がないことが多い。今、一

番輝いている姿をその場で撮影し、家族や後世にも残していくことができたい」という思いが原動力になっています。今年も撮影が進む現場ではお年寄りの輝く笑顔と感動し涙する家族の姿があります。

新型コロナによる自粛期間中に、地域の飲食業の一助になればと岡林さんが個人として取り組まれた「テイクアウトメニュー写真撮影ボランティア」もその思いが現れた取り組みの1つです。このような時代だからこそ、写真館、カメラマンとして地域の中で何ができるかを考えながら日々撮影しています。



地域の方々を撮り続けてきた岡林写真館



自宅に出向いての撮影会

2020年「健康長寿丹波写真展」
9月19日～10月4日 コモーレ丹波の森
10月5日～10月18日 丹波ゆめタウン



丹波市市民活動支援センター

TAMBA CITY CIVIL AND COMMUNITY ACTIVITIES CENTER

〒669-3467 兵庫県丹波市氷上町本郷300 丹波ゆめタウン2階 丹波市市民プラザ内
TEL 0795-82-8683 MAIL ccac@tamba-plaza.jp

開館時間 10:00 - 18:00(会議室は21:30まで) / 毎週月曜日・年末年始休館

<https://www.tamba-plaza.jp/ccac/>

【情報誌へのご意見募集】

「たむたむ」についてみなさんからのご意見、ご要望をお待ちしています。役立つ情報紙と一緒に作っていきましょう。